

---

# 2次元トリップ!

黒猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2次元トリップ！

### 【Nコード】

N2819Z

### 【作者名】

黒猫

### 【あらすじ】

どこにでもいる普通の中学生、榊凛奈は

「家庭教師ヒットマンREBORN！」が大好きなヲタク。

ある日、リボーンの本を読みながら歩いていて「リボーンの世界にいきたくないな！」なんて思いながら信号を渡っていると、信号無視のトラックがつつこんできた。

妙に騒がしいな、と思いながら起きてみると・・・

ツナの家の前이었다。

## 主人公紹介（前書き）

今回は主人公紹介です。

次回から、本題に入っていきたいと思います。  
駄文ですが、見てくれると嬉しいです^^

## 主人公紹介

この小説は、「家庭教師ヒットマンREBORN!」の原作者と  
はいっさい関係がないものです。  
ご了承ください。

主人公・・・さかき榊 りんな凛奈

年齢・・・13歳（中学1年生）

身長/体重・・・153?/45?

性格

どこにでもいる普通の中学生。少年漫画が大好き。特にリボーン。

（ヲタク）

性格は明るいが、落ち込むと立ち直るのにやや時間がかかる。  
居合道や空手をならってる。そこそこ強い・・・かも。  
成績は中間で運動は得意。

## 主人公紹介（後書き）

次回から更新していきたいと思えます！

え、何ですかコレ？（前書き）

・・・書いていたのに全部消したという最悪な事態（泣）  
あれ、保存ってどうするんですたっけ。

まあ、とりあえず駄文ですがよろしくお願いします。

え、何ですかコレ？

『時間だよ。あと1分で支度しないと・・・ただじゃすまないよ？』

ピッ

携帯のアラームからなるアニメボイスを手でとめる。

黒髪の綺麗なロングヘアーが台無しな寝癖のつきかた。彼女は榊凛奈。

「起きますよ！雲雀さんでも、今日は土曜日だからあと1時間寝ても良いよね！」

バンッ

ドアが勢いよく開いて、凛奈の母、薫が入ってくる。

「凛奈！早く起きなさい！今日はリボーンの最新刊の発売日ですよっ？」

二度寝するところを阻止されたが、大事なことを忘れていた。

「そうだよ！今日はリボーンの発売日だよ！」

「だから、早くしないとなくなるわよ？」

「うん！」

目を輝かせながら着替えをする。

「それと凛奈。」

「何？」

「そのアラーム、音小さくしなさい。」

「え、何で？小さいと意味ないじゃん。」

「・・・その、恥ずかしいからよ。」

「え〜！雲雀さんの神ボイスだよ？イケボだよ？明日はツナにしよ  
うとおもっているのに！」

「・・・まあいいわ。早く準備しなさいね。」

「はい。」

薫はそういうと凜奈の部屋を出て行った。

「そっかあ、今日はリボーンの最新刊発売日だったね〜あはは〜」

だらしなく頬をゆるめ、ニヘラ〜と笑う。今の顔は結構危ない。

「っていつか、今何時だ？」

そういつて時計をみる。

「9時半か・・・。本屋は10時からだし、良い時間か。」

そうしているうちに服を着替え終えた。上は黒の長袖に胸元には赤いリボンがむすんでいる。

下はブルーのショートパンツに黒色のレギンスを履いている。

最後はブラウンのジャケットを羽織って準備完了。

もちろん髪セットも欠かせない。黒髪の腰まである長いロングヘアは横に結ばれていた。

ドアを開いて階段をダダダツと駆け上る。ちなみに凜奈の部屋は階段をあがってすぐ左のところにある。部屋はリボーンのポスターやパーカー、Tシャツだらけで、一般人（ヲタクじゃない人）が見たら、引かれるだろう。



もともと、少年漫画なんか読まない凜奈だったが友達に勧められてリポーンを読んでもみると、そのおもしろさに心を奪われた。今ではBLも読めるほどだ。自称では「リポーンが無い世界では生きられない！」だ。

「じゃあ行つてきます!!」

「え、ご飯は？」

「いらない!リポーンが先よ!」

「はいはい、途中で倒れないようにね。」

「は〜い!行つてきま〜す!」

「いつてらっしやい。」

スニーカーを履いて玄関を飛び出る。すぐさまものすごいスピードで走る。

本屋まで20分ある距離をわずか10分で行った。今の時刻はちょうど10時。

「はぁ・・・はぁ、間に合ったぁ!」

乱れた呼吸を整えてから本屋に入る。

「いらっしやいませ〜。」

店員の高らかな声が響く。しかし、今は店員に会釈をしている場合ではない。凜奈は、少年漫画の棚に移動する。すると、ポップな絵柄で「家庭教師ヒットマンREBORN!最新刊!」とかかかっていた。

「あつたあつた!」

すぐに手に取りレジに持って行く。

「420円です。」

凜奈は持っていた500円を渡す。

「80円のおつりです。ありがとうございましたー。」

手に取ったとたん、走って本屋を出て行き、袋の中におさめられたリボン36巻をとる。

「うふふ〜！家につくまで我慢できないし読んじゃおう〜！」

しかし、これがいけなかった。後にありえない出来事が待っているなんて、このときは思いもしなかった。

そしてリボンを歩きながら読んでいた。

「うわっ、デイモン最悪！ツナの骨がボロボロじゃん！」

なんて呑気に歩いていく。そしてそのまま信号を渡る。まだ青だから轢かれる心配はない。

「よし、ツナ！デイモンを倒せ〜！」

そんなことを言いながら歩く。

「お嬢ちゃん！危ない！！」

漫画を読むことに必死だったため、そんな声に気がつかなかった。

やがてパパーッとといううるさい音が鳴り響いた後、気がついた。

「え．．．？」

トラックが凜奈めがけてつつこんでくる。

気がついたときにはもう、遅い。

凜奈はそのままトラックにはねられた。

(え．．．？何がおこっているの？)

自分ではわからなかった。ただわかっていたのは、通行人の「キヤー」という叫び声と、救急車のサイレン。そして、

自分から出ている血の色だけだった。

(あれ．．．。まだ信号青だよ？なのに何で．．．。あ、そっか信号無視ってやつ？あはは、私って馬鹿だな．．．。リボーンを歩きながら読んでいたから気がつかなかったんだ。)

そのまま宙を舞う。そしてそのまま地面にたたきつけられる。不思議と痛みは無かった。

(あゝあ、私、死ぬのかなあ．．．。せめて最後はさ、リボーンの世界に行きたかったよ。まあ無理なんだけどね．．．。)

そんな馬鹿げたことを思いながら、凜奈の意識はそこで途絶えた。

「・・・きろ、オイ。」

「ん・・・んうゝ？まだ眠いよゝ。」

「起きろっつてんだよ。」

「んゝ、うるさいなあ！今日は休みでしょう？もう少し寝たって・・・」

「だから起きろっつてんだよ！変質者！」

「ちよ、獄寺君。相手は女の子だよ。」

「はあ？変質者つて、え？あれ、獄寺と・・・ツナ？」

「！？え、君、何で俺たちのことしつてんの！？」

「10代目！下がっててください！他のファミリーの刺客かもしれ  
ません！」

「ええ！？そんなあ！」

なんと目の前にはツナと獄寺・・・そしてツナの家の前にいた。

え、何ですかコレ？（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

本当は消える前までは長かったんです（笑）

でも消えて・・・

・・・正直いうと気力が・・・（泣）

なんで消えたんだよ！

っていうか、展開早いですね・・・。

ここは2次元！？（前書き）

また続き書いていきたいと思えます！

無事におわるといいなあ・・・。

「ここは2次元!？」

「え、ちょ、え??？」

凜奈はパニックる。そりゃそうだ。目の前には獄寺とツナ・・・リボ  
ーンの漫画に出てくるキャラ  
がいたのだから。

「おい、そのアマ。両手をあげる。」

「はっはいつ!?!」

獄寺の言葉につられて思わず両手をあげる。

「・・・武器はもっていないようだな。どうします?10代目。」

「え?どうするって・・・相手は女の子だし・・・。」

「あ、あの・・・。」

2人で話し込んでいるところをおずおずと手を挙げながらいう。

「黙れ、アマ。」

「え!その、私は決して怪しい者じゃ・・・。」

「じゃあ何で俺たちの名前しってたんだ。」

「え?そういわれましても・・・。」

本当になぜだろう。ただトラックにはねられて、気がついたらここ  
にいたというだけだ。

そんなこと言っても信じるわけがない。

「やっぱり怪しいッスよ、10代目。どこかに縛り付けておきます

「？」

「いや、だからあのね、獄寺君。相手は俺たちと年も変わらないよ  
うだし、しかも女の子だよ？」

「しかし……。」

「ツナの言うとうりだぞ、獄寺。」

「リボーン！」

「リボーンさん！」

（え、あのリボーン！？）

あまりの状況についていけない凜奈は、ただボーツとしてるだけだ  
った。

「とりあえず、ツナの部屋に放り投げてたらどうだ？そのうちなん  
かはくんじゃねえか？」

「そうですね！さすがリボーンさん！」

「ちょ、待てよ！リボーンお前何もわかってないだろっ！」

「本当だったら、瞬殺決めていたところなんだから俺に感謝しろよ。  
その女。」

「はっ！？だから私は、怪しい者じゃないって言っているの！ただ  
の道に迷える子羊です！」

あわてて否定する。

「と、とりあえず、上がりなよ。えーと……名前は？」

「さ、榊凜奈。中学1年生よ。」

「へえ、じゃあ俺の1つ下か。」

（知っていますとも、ツナ……。）

ガチャとツナが玄関のドアをあける。



「あら、ツツ君。もう帰ってきたの？早いわね。」

「え、いやちよつと・・・。」

「あら、ツナのお友達？」

いきなりツナのママンこと奈々が訪ねる。

「いえ！その、道に倒れていたところを助けていただいただけです！」

「え、そうなの？大丈夫？」

「はい！何とか！」

「そう？ゆっくりしていつてね。」

「はい！」

そのまま2階のツナの部屋にあがる。  
入ったとたん獄寺が質問しはじめる。

「さあ、お前はどこのファミリィだ？答えないとダイナマイトくらわすぞ。」

そういつて、両手にダイナマイトを持つ。

「ひっ！獄寺君タンマタンマ！」

「わ、私の話を聞いてください！！！」

そういつと、リボン、ツナ、獄寺が私に視線を向け始める。

信じるかどうか、今はもうどうでもいい。私のことを話さなきゃ・・・！！！！

「その、私は・・・異次元からきたんだと思います！」

「思います？」

ツナが問う。

「は、はい。その自分でもわからないんです。だから確信がないけど……。私は多分

3次元からきました!」

「?3次元はここだよ?」

「えーと、その……この世界は2次元で私が元いたところが3次元なんです。」

「え?つまり……どういうこと?」

「つまり、2次元にトリップしたってことかもしれません!多分。」  
「た、多分なの?」

ツナがあきれたように質問する。

「だから確信がないんです!」

「で、でも俺たちの名前を知っていたのは何で?」

「それは……知っていたとしか言えません。」

「そうなんだ……。」

「その、信じてくれますか?」

「え?うーん……。」

私の言葉にツナは首をかしげる。

「まあとりあえず、信じるよ。俺たちの世界も信じられないようなことだしね。」

「それって、ボンゴレファミリーですよね?」

「うん、そうなんだ。あ、普通にため口でいいよ?」

「え、じゃあ……ツナ兄、で。」

「うん!」

凜奈がそういうと、ツナはにっこりと笑った。

(天使だあああ!! 出血大サービス並の笑顔!! ぶはあっ!)

凜奈は心の中で萌えていた。

「しかし10代目、このアマどうします?」  
「榊……さんのこと?」

「あ、凜奈でいいよ。獄寺……隼人兄も。」

「なっ! お前に名前呼ばれる筋合いはねえっ!」

「まあまあ獄寺君。いいんじゃない、それで。」

「……10代目がそういうなら。」

「でも、本当にどうしよう。トリップしたならここに家もないんでしよう?」

「う、うん。学校も……。」

「そっかあ。」

「なら、家に住ませたらどうだ?」

そこで始めてリボンが口を開いた。

「え、ここに? でも、母さんが許すかなあ。」

「いいわよ? ツツ君。」

「なっ母さん! ? いつからそこに?」

そこには、いつからいたのか分からないママンがたっていた。

「ツツ君のお部屋を掃除しようと思って……邪魔だった?」

「いや、そんなことはないけど、ここに住まわせて良いの?」

「いいわよ? かわいい女の子が住んでくれて母さんも嬉しいわ。」

「……か、母さん。」

さすがツナのママン。心が広い。

「それに学校も並中に通ったらいいわよ。ツツ君と獄寺君と一緒に。」

「そうだけど……。」

「お母様！」

そこで獄寺君が言う。本当になんでツナの前やママンの前だと、こ  
うも態度がちがってくるのか。

凜奈は変なところで感心していた。

「年頃の男女が一緒に住まうって……何か問題があるのでは？」

獄寺としてはもっともな意見。

「それは大丈夫だぞ、獄寺。」

「え、何ですか？リボンさん。」

「ツナが女に手を出すなんて勇気があると思わねえ。」

「な、ひどっ！」

だが、実際その通りだろう。

「うーん、でも困ったわね。部屋が無いのよ。ツツ君、同じ部屋  
で良い？」

「はあっ！？ランボとかの部屋は！？」

「それが、もう狭くなるのよ。わるいけど……凜奈ちゃん？」

「は、はい？」

「ツツ君をよろしくね。」

「え、ええ、もちろん(?)です。」

「じゃあさっそく並中に転校手続きしないよね」

そついうと部屋から出て行った。

「そ、そんな母さん……。」

「あの、ごめん……。」

「え、いや、別にいいよ。あはは……。」

「おい、その凜奈とかいう女。」

「何、隼人兄。」

「10代目に手エだしたら……ぶつ殺す!」

「わ、わかつたわよ!でも、とりあえずツナ抱きしめて良い??」

「はあっ!??」

答えを聞かずに、バツと抱きしめる。

「本物のツナだあ!!かわいい!天使!」

……もともとリボンヲタクである凜奈はツナが現れてから抱きしめたい衝動を抑えていたため、

今、耐えられなくなって……ゲージが爆発した。

「ちよ、榊!10代目から離れる!」

今さっきの落ち込みから、リボンの世界にきたんだから、これを  
楽しまないと

もつたいないという思いに変わっていた。なんとも前向きなプラス  
思考だ。

そんなわけで、ツナたちの生活が始まるのだった・・・。



ツナとの生活！え、おちこみ？ナニソレおいしいの？（前書き）

大丈夫なのか、この小説・・・。

では今回も妄想爆発でお送りします〜！

今回も、全部消さないように注意しよっと・・・。



ツナとの生活！え、おちこみ？ナニソレおいしいの？

「え〜と・・・凜奈、ちゃん。なんかジュース飲む？オレンジとグレープあるけど・・・。」

「え？あ、えーと・・・じゃあオレンジジュースで・・・。それと「ちゃん」はいらないから。」

「分かった。今、持ってくるね〜。」

（・・・何の恋愛ゲームですか、コレ！！！！相変わらず隣で私を睨んでくる

「自称10代目の右腕」がいるけど・・・そんなことはどうでもいい！！この状況を  
楽しまないと！！）

あれから凜奈は少し話をして、今、ティーブレイク(?)中だ。  
落ち込みなど、とつくのとうに吹き飛んで、この状況をヒーハー！  
真っ最中。

「おい、榊つつう変態女。」

「はあ！？誰が変態よ！自称10代目の右腕の隼人兄！っていうか  
名字で呼ぶな！」

「なっ！俺は自称じゃねえ！真正正銘の10代目の右腕だあっ！！」

「まだ完璧な右腕じゃないでしょう!？」

「いいや！完璧な右腕だ！」

「・・・な、何やってんの？二人とも。」

そこでツナが大福とオレンジジュースを3人分もってきた。ちなみにリポーンは今、外出中だ。ちなみにママも凜奈の転校手続きをしに、並中へでかけている。

「ツナ兄、聞いてよっ！隼人兄が私のことを、「変態女」っていうんだよ！？ひどくない!？」

「本当のことじゃねーかつ！いきなり10代目に抱きつきやがって!」

「ほほっ！隼人兄は、ツナ兄のこと好きだもんね!」「ツナ命」だもんね!いいのよ?私に妬いても?私はBLもイケる口だから!別に引いたりしないわ!」

「なっ!BL!?確かに俺は10代目を好きだけでも、その好きじやねえ!尊敬の意味をこめての好きだっ!!!」

「ふっん!あっそ!まあツナ兄に右腕と認めてもらえるよう、がんばることね!」

「んだとコラアッ!」

「ちよ、やめてよ二人とも!落ち着いて。ホラ、お菓子ももってきたから!」

(もお、最悪だよ!なんか意味分からない女の子が住むことになるし!)

「ツナ兄がノ10代目がノそういうなら・・・ノそうおっしやるのなら・・・。」

「はあ・・・。とりあえず座りなよ。」

「うん・・・。」

そこで凜奈はオレンジジュースを一口、口に含む。甘酸っぱい。

「もう二人とも喧嘩しないでよ?ただえさえランボとか(獄寺君)で大変なんだから・・・。」

「はあ〜い。もとはといえば隼人兄が悪いのに・・・。」

「んだとお!？」

「はいはい、獄寺君!落ち着いて!」

「っ・・・分かりました。」

「ところで、凜奈。」  
「うん？」

ツナが凜奈に呼びかけた。何か質問とかあるのだろうか。

「こんな、のほんとしていいの？その、3次元？に戻る方法とか考えた方が・・・。」

「ごもっともな意見。」

「うん、そうなんだけどさ・・・。」  
「っていうか、なんでこの世界にこれたの？」

「え」と、その・・・横断歩道でトラックに轢かれたのよ。あはは・・・。」

「ええ！？笑ってる場合じゃないよ！今頃重症じゃないの!？」

「あはは・・・そうだよね・・・でも、骨折どころか痣一つないし。」

「それはすごいですけど・・・。」

「うん、なんかさ。最後に死ぬんだしたら、ツナ兄たちの世界にいきたくないあつて思ったら、こつちの世界にきちゃった・・・みたいな？なんかパラレルワールドみたいだね。」

「パラレルワールドっていえば、百蘭たちのこと思い出すな・・・。ろくなことなかったけど。」

その言葉で凜奈は一つ疑問がわいた。

「あれ？ツナ兄たちはもう、百蘭戦終わったんだね。」

（あれ、でもアルコバレーノ戦はどうなんだろう。漫画の世界とこの世界って、必ずしも比例はしてないってこと？）

「うん、終わったよ。」

「じゃあ、シモン戦は？」

「あゝ炎真君のこと？」

「じゃあ、戦いは終わったんだね。」

「うん。」

「じゃあ・・・アルコバレーノ戦は？」

「え？アルコバレーノ戦？何それ。」

「あ、知らないんだっいたらいいよ。」

（ってことは、この世界はアルコバレーノ戦が始まる前の日常編ってことか・・・。）

つまりはここは漫画で言う、ギャグ的な日常編だ。凜奈は戦いの世界にこなくてよかった、とほっとした。

「にしても、本物のツナにあえるなんて感激！あ、ねえねえ雲雀さんもいるんだよね。」

「え、うんいるけど・・・。雲雀さんに会いたいなの？」

「うん！」

「あはは・・・あの雲雀さんに会いたいなんて物好きだね・・・。」

「ったくあのバトルマニアめ。」

「あはは・・・。」

「まあでも、並中に通うことになったらイヤでも毎日あえるからいいつか！」

凜奈はふふふ〜ん とご機嫌に口笛を吹く。もう前の世界に未練などない様子だ。

「でも雲雀さんにあって何するの？」

「ふふふ・・・それはね、雲雀さんの生ボイス「咬み殺すよ」を携帯に録音してメールの受信音にする!」

「ええ……。」

「あ、その前にツナ兄にやってもらおうかな。」

「ええ！？俺はいいよ……。」

「じゃあ、嫌だけど隼人兄。」

「嫌だけどつてなんだよ！」

「しょうがないでしょ！私の友達がすごく隼人兄がすきなんだから！」

「なっ！俺は女共に興味はねえっ！」

「え？誰も女友達とはいってないんだけど？男友達なんだけど？何を期待してるのかな？隼人兄！」

「てめえっ……。」

「喧嘩しないで！」

また、喧嘩になりそうなところをツナにとめられる。そのおかげで口喧嘩にはならなかった。

「みんな仲良くやってる？」

ガチャと無機質な音が響いてドアの方を見ると、ママンがたっていた。

「はい、お母様！」

「母さん！何しにきたの？」

「あ、そうそう。凜奈ちゃんの転校手続きやったからね。」

「あ、ありがとうございます！」

「さっそく明日からだけど……大丈夫？」

「え、明日！？っていうか、今は何曜日？」

「え、今？日曜日だけど……。」

「マジ？明日からか……。あの、奈々さん。」

「うん？ママンでいいわよ。」

「えーと・・・教科書を持っていないんですけど・・・。」  
「あ〜。」

ママンが「大丈夫よ。」とこたえる。

「凜奈ちゃん、今中学1年生？」

「あ、はい。」

「ならツツ君の1年生のときの教科書貸してあげるわ。」

「ありがとうございます！」

「いえいえ〜、不便なことがあったら何でも言ってね？」

「はい！」

なんと心優しいママンなんだろう、私のお母さんとは大違い。と、  
凜奈が心の中で思っていたことは  
秘密だ。

「じゃあ明日からがんばってね。」

「はい！」

そしてさっそく凜奈は、ツナ兄たちが通う、並中に通うことになったのだ。

・・・いいのか凜奈。元の世界に戻ることを考えないで。



ツナとの生活！え、おちこみ？ナニソレおいしいの？（後書き）

今回はあまり前進しませんでしたね。

ぐだぐだですいません。

そのうち雲雀さんも出てきますからお楽しみに！

では、ここまで読んでくださってありがとうございます（＾o＾）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2819z/>

---

2次元トリップ!

2011年12月11日13時51分発行